



差分多数の超誘惑的画集。
欲望回帰最新作！

峰不二子

欲望
回帰

Lupin The Third



































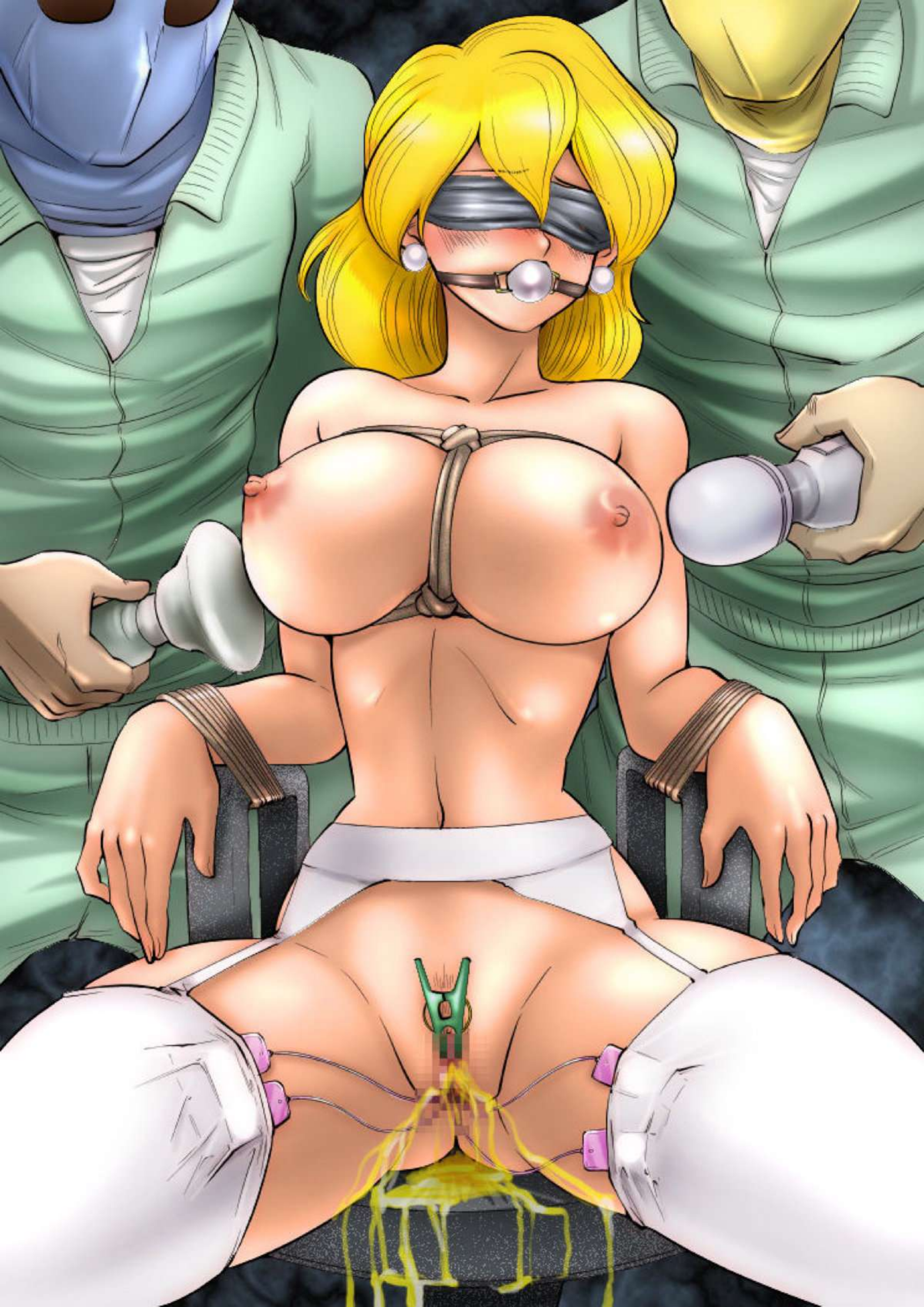




































































プロローグ

——奥羽地方 山中の廃屋。

その廃屋が本来の所有者に打ち捨てられ、相当な年月が経過しているであろうことは、今にも崩れ落ちそうな屋根や塗装の剥げ落ちた壁面から容易に想像できる。しかし今、そのヒビの入った小さな窓ガラスからは、微かな灯りが漏れていた。

——室内。

荒れ放題に散らかった室内は、放置されたゴミの放つ腐敗臭に“男たち”の体臭が交じり合い、筆舌に尽くし難い異臭に満ちている。だが、そこにいる“男たち”は、まったく意に介さなかった。

三男「見つけたぜ、アニキ。——モロッコだ」

次男「モロッコおおお!?あの女、なんでまたそんなトコにいやがるんだ」
三男「なんでも、どこぞの民族の遺産ってお宝を狙ってるって話だ。他にも同じお宝を狙ってる連中がいるらしいからな。相当値の張るお宝なんだろぜ」

自らの情報収集能力を誇るように胸を張る青ジャージの男。勢いよく立ち上がった拍子に、傍らのゴミ袋が転がって中身がこぼれる。



豊富に切なバストやヒップと対照的に、露出したウエストは贅肉一つなく、
 びれを呑んでしまっただけで、白黒のコントラストは驚くほど、
 不二人前、三兄弟の骨髄まで、味い尽くすように、
 取返した。だが、その兄弟は三代の決闘で襲撃し、憎悪の復讐の感、
 取り戻した。彼は、最後の銃弾で耳や鼻を吹き飛ばし、復讐の感情、
 うる骨を砕かされた。彼は、執念と不器用な復讐の標的となつて、
 は、バケモノ兄弟の執念と不器用な復讐の標的となつて、
 日を降、三兄弟の執念と不器用な復讐の標的となつて、
 を股に、三兄弟の執念と不器用な復讐の標的となつて、
 振り回す。彼らも一度、滾るような興奮と狂喜を覚えるのも無理はない。
 掴んだ。彼らも一度、滾るような興奮と狂喜を覚えるのも無理はない。

長男「へっへっへ、今度は輪姦だけじゃ物足りねえ。孕むまでタツプリと
 次男「あぁ、尽くしてやるぜ」女に生まれたことを後悔したくなるくらいに犯し
 三男「デカくなつた腹抱えて、半ベソかいて泣きを入れる姿が目には浮かぶぜ」

口々に勝手を決意と妄想を言い立てながら、彼の旅には復讐に燃える三兄弟は旅の支
 だが、始めの彼の荷物には驚くほど少ない。この旅には復讐に燃える三兄弟は旅の支
 するのでは、彼の荷物には驚くほど少ない。この旅には復讐に燃える三兄弟は旅の支











(ルパン……何やってるのよ。早く、早く助けに来なさいよッ!!)
それにあの変態オカマ……絶対にこの手で殺してやるッ!!)

普段は裏切ってばかりの男と、彼女を捕らえた男に悪態をつく不二子。そうでもして敵愾心を奮い起こさなければ、今の自分を辛うじて維持している生きる気力までが萎え果て、そのまま生命まで失ってしまうのではな
いかという恐怖がある。

(ああ……冷えたワインが飲みたい……シャブリが飲みたい……
でも、ロゼはダメ。白の……モロッコで一番のワインセラ―を店ごと買い取
ってやる……)

不二子がそんなことを思った時だった。どこからか、微かに車のエンジン音が聞こえてきた。しかも、こちらに近づいてくる。一瞬、願望による幻聴かと疑ったが、エンジン音は着実に近づき、やがて寺院の前で停まった。

(ルパン!? それとも……アイツらが戻ってきた……)

声を上げかけたところで、辛うじて思い留まる不二子。正体の分らない相手
手に、その行為は危険過ぎる。どのみち、唇にはきつく猿轡が嵌められ、
油断の無い視線で、寺院の正面を睨み付ける不二子。凝視する中、寺院の
入り口に人影が差した。それも三つ。そのシルエットは、ルパンでも秘密
結社の首領でもなかった。



三男「おうおう、蕩けそうなエロい顔しちゃってよお」
次男「クウー！！繩が喰い込んだお股とおケツがクネクネ踊り出してらぜ」

言われずとも、豊富な腰と尻が淫らに蠢いてしまっていることは不二子も認識している。しかし、腰の卑猥な円運動まで制御する余裕はない。彼女の意識は精一杯であり、腰の卑猥な円運動まで制御する余裕はない。

長男「へへっ、はしたねえケツだぜ。おら、こうしてやるから、真っ直ぐ立てよ」

素早く動いた右手が赤い口バツクの尻紐を掴み取り、それをグイッと乱暴に引き上げた。デリケートで敏感なヴァギナに細紐が喰い込み、爆発するような悦楽が背筋を駆ける。

不二子「ンツツッーウー！」

ギリギリの背伸び状態だった女体が、限界以上にピーンと反り返り、汗まみれの美貌がアツパカツトを喰らったかのようにガクンと仰け反る。

長男「おいおい、汁がダラダラじゃねえか。まったくエロい牝泥棒さまだぜ」

陰湿な秘所鬨りに侮蔑的な言葉、鬨りまで加わり、不二子の貌が屈辱と恥辱でカツと熱くなる。だが同時にマゾ性を開花させ、肉体が背徳的な官能と肉欲が充満していくのが自分でも分る。長男が喰い込ませた尻紐をグリグリと左右に揺さぶると、歪められた秘唇から白い粘液がジワジワと滲み出し、それを横にズラすと、ドロドロの泥濁と化したヴァギナが現れた。

長男「二年前より感じやすくなったんじゃないか？これなら面倒な前戯はいらねえな」

不二子「ウツ！？ンウウウウウー！！」（なっ！？ま、待ってっ！！）

今犯されたら、本当に狂ってしまいかもしれない。あの、思い出すだけでも呪わしい。悪夢の中の自分と同じように悲鳴を搾り出す。だが、そんな悲鳴も空しく、長男は背後からいきり立った陽根を一気に挿入してきた。

不二子「オグウウウー！！ー！！ー！！」
長男「ヒヤッハッハッ！！イイ声だ！！最後まで飽きさせなよ！！」

カリ高の巨大な先端が柔らかい秘唇を捲くり上げながら、狭小な肉穴をメリメリと掘削していく。愛液に濡れた襷という襷が狂ったように蠢動し、異形の侵入者を何とか食い止めたようにするが、それは侵入者にこの世のものとは思えない快感を与えるだけだ。

長男「かあー！！相変わらずのキンチャク具合だぜ。」

不二子「ウ・ウ・グ・フツ・フツ・」

そんな嘲笑とも賞賛とも取れる長男の言動にも、不二子はガクガクと無体に痙攣するだけで、反論する余地を失っていた。“不二子はガクガクと無体な感、それほどまでに圧倒的だった。性を粉微塵にされるような甘美感”

第三章 雌肉不二子吊るし上げ

その瞬間、意識を失ってダラリと垂れ下がっていた四肢が電流を受けたように仰け反った。汗まみれの背が折れそうなるほどに反り返り喚叫を上げる美貌が天を向いて白い喉元を晒す。氣力を振り絞って背後を振り返ると、股間を密着させた次男と目が合った。

次男「いよおろお目覚めかい不二子ちゃん。なら無茶しても大丈夫だな」
不二子「ングウウウウウッ！！ウムウウウッ！！」

不二子の返事を待たずに、未だ脱力したままの左脚が太腿から掴まれ、高々と持ち上げられた。ストリッパーもかくやという股間から丸出しの破廉恥ポーズだ。不二子の顔面が羞恥のあまり力ツと熱くなる。咄に前方へと逃げようとするが、次男は空いた手で拘束ロープを引き絞る。それを許さない。

次男「へっへっへ、このポーズだと、汁だくのアソコまでバッチリだぜ」
不二子「グフウッ！！」

そう言うなり、贅肉ばかりがタツプリと肉付いた腰を力任せに思い切り打ち込んでくる次男。股間同士が密着度は脚を閉じている時とは比にならない。長大な男根が根元まで丸々密着に呑み込まれ、しどどに溢れる愛液と長男の精液を押し退けながら、脆弱で敏感な子宮口を激しく打ちぬす。

不二子「オッ！グフウウウー！ー！ー！ー！！」

瞳がグルンと裏返り、瞬間的に飽和状態に達した意識が弾け飛んだ。だが、手にしたロープを引き絞るながら次男が新たな一撃を叩きつけると、悶絶する女体が鞭打たれたように戦慄く。

次男「子宮がヒクヒク嬉し泣きしてるぜ。
どうやらオレたちのSEXの相性はバッチリみたいだな」

考える時間を与えないまま、目一杯突き込んだ腰を力強く左右に揺すり立てる次男。鋒のように野太く硬いダイヤツク先端で膣底をゴリゴリと乱暴に圧迫されると、激痛と共に泣き喚きたくなるほどの圧倒的な甘美感が噴き上がってきた。二年ぶりの淫虐により、封印していたマゾの血を目覚めさせられた不二子にとって、それは自慰行為では決して味わえない凄まじい感覚だった。

(だ、ダメ……頭が……おかしく、なる……)

猿轡からドロリとこぼれ落ちる夥しい量の涎。そこには、自らの哀しい性(さが)に打ちのめされた女の弱々しい嗚咽が多量に含まれていた。激しく呼吸を喘がせながら、熱れた女体の奥底から発せられる狂った衝動に翻弄されることしかできない不二子。

次男「抵抗しないんなら、そろそろ本気出しちゃうぜ」

屈辱と肉欲の狭間でブルブルと媚肉を震わす妖艶な美女の姿に、既に我慢物が一段とサイズと硬度を高めまく。軽口こそ叩いているが、既に我慢し切れなくなっているのは次男も同じだ。



(続き)
 激し過ぎる抽送に、丸出しにされた小さな膣孔が無残に捲れ、歪み、捻れ
 を取り戻した女陰粘膜は、裂けることなく、ダイナモ装置のよう、に快感へと転
 換し、不二子を責め苛む。
 (す、すごいっ！……あっ、ああ……たまらない……っ！)

ガクガクと力任せに肢体を揺さぶられながら、子宮口を滅多打ちされると、
 瞳の奥で何度か火花が飛び散る。豊かな乳房がブルブルと激しく振られ、
 乱され、口はプで搾り出されたためでも狂って、
 ているのは、プで搾り出されたためでも狂って、
 不二子は感じていた。そして悶え狂って、

(ま、待って……このまま犯されたら、もう……)

耐えられそうにない。カラダより先に、コックロが砕け散ってしまう。なかつた。
 だが、歴戦のレイパーたる次男に、そんな言訳が通用するはずもなかつた。
 頑丈なロープとムチムチの太腿。手にしたそれらをグッと掴み取り、運動を開始
 する。溜りに溜った精を撒き散らすための——ピストン

不二子「アウッ！アガッ！グッ！グハアアア！！」(へへ続く)

(もう・・・やめて・・・これ以上・・・辱めないで・・・)

三男に「向けられた瞳、今にも雫が溢れそうに潤んだ瞳が懸命に訴え、りしかし、訴えられた相手が悪かつた。彼れにとつて、潤んだ瞳が懸命に訴え、んな彼のとなつた手段は、虐心を駆り立てる刺戟的なエッセンスだ。だが、そ

三男「可愛そうになあ。苦しいかたろう。オレはアニキたちみたいないから安心しな」

二人の兄からの動き、イングを無視し、三男がゆっくりと不子に身体を重ねてきた。その動かし、草は驚くほど滑らかだ。まるで、恋人同士が初め、愛の営みを交わす時のよう。胸に慎重さで、緊張で固くなつた。不子子の全身を愛撫していき、胸に慎重さで、緊張で固くなつた。不子から首筋へとい乳房を根元からヤワと揉み上げつつ、無防備なうなじ

不子子「ンッ、アフウッ・・・」

長男と次男に犯された時にはなかつた、優しきすら覚えてしまふほどの細な刺激。不意を突かれた時にはなかつた、優しきすら覚えてしまふほどの思わぬ甘い声。漏れてしまふ。熱れ盛りの女体はゾクゾクと敏感に反応し、

(こ、こんな・・・こんな風になら・・・)

先程までとは全くべクトルの異なる感覚に、戸惑いと動揺を禁じえない。不子子。長男と次男の貴めを燃え盛る業火で、火炙りとするならば、三男のそれは、柔肌の表面を蒸し殺し、右から左へ、尖った乳首の裏まで、軽く舌が照る。口に柔らかな乳肉がほぐされ、固く尖った乳首の裏まで、軽く舌が描くように、柔らかな乳肉がほぐされ、固く尖った乳首の裏まで、軽く舌が先が踊る。かと思えば、丹念に舐め上げ、敏感な膝の裏まで、軽く舌がリと唾をまぶした舌先で、細い上唇をかか、敏感な膝の裏まで、軽く舌がさには無縁のどこまでも、細い上唇をかか、敏感な膝の裏まで、軽く舌が蠟が溶けていく。どこまでも、細い上唇をかか、敏感な膝の裏まで、軽く舌がた汗に濡れる。くよけに悦ぶ。溢れ出した、白磁の愛撫。柔らかな身体中の性感帯から、の穏やかな快感に、淫靡な輝きを放ち、衝動にすら思わぬ潮肌を吹き出した。いほど

三男「おうおう、ウツトリしちゃって。お前はオレに犯されてるんだぜ？」

半ば恍惚とした想いからハッと我に返ると、目前に三男の顔があった。マスクで素顔は見えなくても、その顔が下卑た嗤いを浮かべていることは明らかだ。

三男「まったく好きモノのねーちゃんだぜ。」

不子子「レイプ物に出てくる女優でも、もうちよつと抵抗するぜ」

猿轡の奥から漏れるくぐもった呻き。そこに満ちる感情は、舌を噛み切りたくなるほどの恥辱と屈辱だ。

(悔しい・・・こんな、最低の男に・・・感じさせられるなんて・・・)

不二子「ウフッ！ウウウウツツ————ッ！」

シートに巨大なシミを広がるほどにまで濡れそぼった媚裂にズブリと挿入されただけで、肉欲が充満した女体は軽い絶頂にすら達していた。まるで身体がフリと浮き上がったような浮遊感。絶頂に意志とは関係なくヒクヒクと拘束された身体が、ピーンと突っ張り、膣壁が意図なくヒクヒクと蠢く。その結果、絶対に気付かれないオルガズムの事実を、如実に三男に告げてしまう。

三男「嬉しいねえ。」

不二子「嬉しいうんはよっぽどオレのデカマラを気に入ってくれたみたいだ。そうでなきや、突っ込んだだけでイッたりしないよな？」

不二子「グッ、ウムウウウ。」

わざわざ腰まで止めて、せせら笑う三男。未だオルガズムの余韻に囚われた不二子はビクビクと情けなく身体を震わせる。例外だ。彼女の誇り高い心は、血を吐くような屈辱と絶望に慄いている。

（こんなヤツの……愛撫で……わたしは……）

絶対認めたくなかった。

自由を奪われ、犯されていくという事実ではない。今の自分は、強姦魔にすら欲望し、喜悦を覚えているという事実である。この自分は、強姦魔にだが、現実はどこまでも過酷だった。心身の不一致に苦悶する不二子の姿をタップリと満喫した三男が腰を使い始めると、美神のようなグラマラスな裸身はより生々しく、あからさまな反応を示し始めた。

不二子「アッ……ンアッ！！アウウッ！！」

女の泣き所とツボを把握した適度な強度と的確な深度。隠れたマゾの資質を強制開花させられた今の不二子に、感じるなというのは無理な相談だった。猿轡から漏れる声はみるみる内に、熱情と悩ましさを深め、流れ落ちる汗と愛液の量が乗数的に増加していく。

三男「おら、もつと自分を曝け出せよ。」

（ち、違う……わたしは……わたしはそんな女じゃ……ない……）

浅く深く、早く遅く、不断にペースを変えて責め立てる三男のピストンに、不二子は息も絶え絶えになりながら懸命に頭を振る。そんな彼女を嘲笑うように、三男は腰の動きは休めないまま両手で巨乳を根元から掴み取り、極大のマシユマロのような量感と質感を堪能する。

不二子「フウッ！！オ、アアアアッ！！」

66センチのサイズを誇る乳房をネットリと揉みしだかれ、その頂点でそり立つピンク色の肉芽に歯を立てられると、何も考えられないほどの魔悦が背筋を突き抜ける。そこに、エラ高の力でのスポットを弾くように巨根を使われると、まるで感電したかのように全身が震えてしまう。

次男「へっへっへ、ハラん中で∞つのローターが暴れ回るってのは
不二子「んんんッ!!グムウウッ!!!!」

懸命にかぶりを振る不二子。緩やかにウェーブするブロンドヘアから珠の汗が飛び散り、点々と床を汚した。椅子に縛り付けられた彼女の全身は、夥しい量の汗でテラテラと濡れ光り、剥き出しの白い素肌は熱病にかかったかのように紅潮している。

長男「ああ? ∞つくらいじゃ物足りない、ってか?」

長男の手が、ガーターストッキングの縁に捻じ込んだ∞つのリモコンを操作した。——全て『最強』に。

不二子「オゴオオオオオオオ!!!」

その瞬間、肘掛椅子に拘束された裸身が、蹴り上げられたように飛び上がった。不二子の秘所に無理やり捻じ込まれたローターは、連発のピンポイントバツテリトを合計∞つの強力なものに交換するのと共に、オドリでは無い。プラスタック製の軸受を鋼製ベアリングに交換する特注品だ。これら改造により、ク振動は数倍、耐久性も著しく向上している。その注目を集めた蜜壺は、今にも内側から砕けてしまっている。その凄まじい振動に責め立てられていた。

(こ、壊れる!!壊れちゃうっ!!)





下卑た嗤いと擲楡の音が上下左右からロク々に浴びせられ、不二子のプライドをズタズタに引き裂いてゆく。無意識の内に、彼女の手と腰の動きが僅かに鈍る。

不二子「あぐふっ！ぐうううっっっ！！」

首に巻きついたロープが強く引き絞られ、三本の男根に奉仕する肉体がピントとろなりに反り返る。天を仰いだ唇は金魚のようにパクパクと開閉しているが、求める酸素は彼女の肺の手前で差し止められている。

三男「誰が休めって言ったよ。ケツと手は休めるな」

不二子「ア・オ・レ・は・こ・の・ま・ま・で・も・い・い・け・ど・な」

長男「ま、オレはこのままでもいいけどな」

首を絞めた時のアソコのヒクつきは絶品だ

蒼白を通り越し、漂白されたように不二子の貌から色が失われる。それは対照的に浮かび上がった。こめかみの血管が惨たらしい。10秒、10秒と時間だけが経過していく。呼吸と血流を停止させられた肉体が白目を剥き、断末魔の痙攣を起こし始めたところでようやくやく首のロープが僅かに緩んだ。

不二子「——ガ、ガハッ！！ゴホッ！ゲボッ！！」

思わず両手を離し、身体を丸めて咽返る不二子。だが、今度は長男がそれを許さない。

長男「ちっ、もうちよっとだったのによお！まったく気の利かねえ女だ！！」



腹立たしさを晴らすように長男がグンツと大きく腰を突き上げた。

不二子「ギャウウウツッ!!」

息も絶え絶えの子宮口をまともに強打され、丸まっていた身体が鞭打たれたように逆方向へ反り返る。仰け反って硬直する不二子を、長男がこれまでもとは打って変わつたようなハイテンポで責め立てると、姦淫に煽られる女体から咽び泣きと共に哀訴の聲が漏れた。

不二子「はっ!! あんっ! ひっ!! ひっ!! ゆ、許してっ!!」

長男「おらっ!! 許して欲しけりや、ちゃんとお腰を使え!! ケツを振れ!!」

三男「そうさそうさ。手っキも忘れるんじやねぞ」

三男「手を抜いたら。分ってるんだろな?」

絶息と魔淫の間で悶絶する不二子を脅迫するように、首に巻きついたタイガーロープがギリギリと音を立てる。首に巻きついたタイガーロープは、唇を血が滲むほど強く噛み締めながらも——腰を、手を、動かした。肉槍が弾むほどに膝を使ってヒップを激しく振り立て、両手に掴んだ異形の肉槍を懸命にしごき立てる。

長男「やっとなん奉仕プレイっぽくなってきた。おい、もっと締め付けろ」

三男「おんなら、そのでっかいチチをブルンブルン揺らせよ。早く終わるかもな」

三男「おんなら、そのでっかいチチをブルンブルン揺らせよ。早く終わるかもな」





次男「おうおう、マ○もケツもポツカリ大口を開けてるぜ。それにしててもスゲえ大洪水だ。一体何回イッたんだ？ バイブ相手によお」

剥き出しの股間に浴びせられるネチネチとした嘲りと鼻息に、ようやく淫虐から開放された筈のヴアギナが再び覚醒する。未だパツクリと口を開いたままのそこが急速に熱を帯び、ヒクヒクと淫らに蠢いて花弁から淫蜜を滴らせる。

次男「おうおう、エロい肉ピラがヒクヒクしててるぜ。あ？ おまけに、また濡れてきたんじやねえのか、オイ？ あたし、見られるだけで濡れちゃうの、ってかあ？」

そう言ってゲラゲラと嗤う次男。それは比喩でも誇張でもない。全て、事実だ。

不二子「——見ないで……」

ずっと黙りこくっていた不二子から絞り出すような声が漏れた。消え入りそうな、それでいて、魂が絶唱するような響きを含んだ小さな声。

不二子「お、お願い……見ないで、見ないでよお……」

不二子は泣いていた。声を張り上げた。た。だ涙を流し、喉を震わせて泣いていた。彼女に涙を流させたのは、プライドの塊のような彼女にとって、最も縁遠い筈の感情だった。激しい嫌悪、他ならぬ自身に向けられた嫌悪、自己嫌悪。



肉片に砕いて、どの憎悪も向けるの。けられ、自分自身。ど一杯握り締めた憎悪の名（やいば）を突き立てたのも自分。ならば、突き立てられたのも自分。心に刻まれた傷は、他者に刻まれる以上、不二子は今、確かに壊れ始めていた。ポタリ、ポタリ、また一つと刻まれる。

















義務感にも似た強迫観念に鞭打たれ、不生子がノノ絶頂歩み再開する。
 われは跨いだ股間に、新しい原因だ、と芽生えだけ、口まで、ノノ。絶頂歩み再開する。
 ろうた。口股間に、新しい原因だ、と芽生えだけ、口まで、ノノ。絶頂歩み再開する。
 脚の長い彼女に、張る。粘り、剥く。履き、更け、口まで、ノノ。絶頂歩み再開する。
 押し下げる。敏感な陰膜を削り、取ら、履き、更け、口まで、ノノ。絶頂歩み再開する。
 っは脆弱で、合わない。粘り、剥く。履き、更け、口まで、ノノ。絶頂歩み再開する。
 婦人は到底、辛そう。荒い息、吐き、刻一刻と熱気を増して、緩く、引、切、り、無
 び、す。底、似、合、わ、ない。粘、り、剥、く。履、き、更、け、口、ま、で、ノ、ノ。絶、頂、歩、み、再、開、す、る。
 こ、が、一、歩、き、た。辛、そう、荒、い、息、吐、き、刻、一、刻、と、熱、気、を、増、し、て、緩、く、引、切、り、無
 走、る。一、歩、き、た。辛、そう、荒、い、息、吐、き、刻、一、刻、と、熱、気、を、増、し、て、緩、く、引、切、り、無
 そ、し、て、次、なる、一、歩、き、た。辛、そう、荒、い、息、吐、き、刻、一、刻、と、熱、気、を、増、し、て、緩、く、引、切、り、無

「アッ……ヒイイイッ……」

不、二、子、は、甘、美、な、悲、鳴、と、共、に、汗、ま、み、れ、の、裸、身、を、ヒ、ク、ヒ、ク、と、震、わ、せ、た。
 メ、ー、ト、ル、置、き、に、作、ら、れ、た、汗、プ、リ、と、口、を、シ、ョ、ン、ン、ン、と、塗、ら、れ、る。
 膜、保、護、と、い、う、名、の、元、に、剥、き、出、さ、れ、た、汗、の、滴、る、額、が、苦、しい、突、き、出、し、の、間、を、引、切、り、無
 摩、擦、に、よ、つ、て、神、経、を、剥、き、出、さ、れ、た、汗、の、滴、る、額、が、苦、しい、突、き、出、し、の、間、を、引、切、り、無
 固、い、結、び、目、を、乗、り、越、え、る、度、に、汗、の、滴、る、額、が、苦、しい、突、き、出、し、の、間、を、引、切、り、無
 なく、内、股、に、な、つ、た、美、脚、が、更、に、汗、の、滴、る、額、が、苦、しい、突、き、出、し、の、間、を、引、切、り、無
 しい、に、縋、り、返、し、吐、き、出、さ、れ、る、呼、吸、は、刻、一、刻、と、熱、気、を、増、し、て、緩、く、引、切、り、無

(だ、でも……これ以上歩いたらまた……止まって……イッちやう……)

結び目を乗り越え、またしても絶頂に至る不二子。しかし今度は、歩み止めるか、小水まで垂れ流し、パンパンに張り詰めた乳房から母乳を滲ませながら歩みだす。決して止めない。

原不子律しているのは、家畜や奴隷にこそ相応しい思考と行動の
どれほどの苦痛も屈辱も無視し、支配者の命令を貫徹する。
屈辱も苦痛も感じないわけでは、いや、彼女の上っ口とカラダは、
これを増して、引き裂かれないように絶叫を上げていた。それら
をことごとく無視し、もしくは重きを置いて、支配者の命令を守
る上で優先し、死守しなげればならないのは、支配者の命令。それを
なら、支配者の命を守り、屈辱しなげれば、更なる受難が彼女を襲うことは、
だから、野生に生きるケダモノが調教師の手管によって驥を受け入れる時
そのままの発想プロセスだ。その姿は、あまりにも哀しく、絶望的で、
飼いの馴らされた身重の女豹。どこか恍惚とした色も帯びている。それが、
絶対的な恐怖に押し潰された、末の狂気故か「神」にも近い絶対的存在を見
出したもの特有の欣喜故か、今はまだ判然としなかった。







第十章 妊婦アナル姦鬼畜中出し

次男「おらっ！ああっ！いくぜっ！う、ぐうううう！！」
不二子「ああっ！あんんっっっ！！」

腹腔内に感じるドクドクという男根の脈動、そして胎内を溶かさんばかりに拡散していくスペルマの熱感。今日一日に限っても、それを感ずるのは何度目のことか。まるで意志のないダッチワイフのように、ひたすら犯され、穢される日々。用済みとばかりに不二子を地面へと投げ出した。

不二子「グッ！！」

咄嗟に腹部をかばおうと後手に縛られた身体を捻った拍子に、肩を強打した不二子が苦悶の呻きを上げる。何故そんな行動をとったのかは、本人にも分らない。ただ、勝手に身体が反応したか、呪われた子である。彼女にと腹の中の子は、望まれなかつた子であり、呪われた子である。母性に本能的な抱ける筈がない。今だけ、瞬間的なもので、呪われた子である。嗟に腹の子をかばおうとしたり。あ、理性ではなく、本能として。不二子は懸命に自由の利を守ろうとしていた。あ、理性ではなく、本能として。不二子は懸命に腹の子を守ろうとしていた。あ、理性ではなく、本能として。不二子は懸命に

不二子「う……あ……壊れ、ちやう……やめ、て……」



その一言に不二子の身体がピクリと震えた。そして、ワナワナと唇を震わせながら言葉を絞り出す。

不二子「お、おしり、を……」

長男「ああ？聞こえねえぞ」

不二子「お……お尻を……使……」

長男「使……？お前、まだ自分の立場が分……てねえのか」

長男の手が膨れ上がった腹部を撫でるように這い回る。時折、圧迫するよ
うに掌に力がこもると、不二子の進退は窮まった。

不二子「う、ぐぐ……お尻……を……使……て……下……さ……い……」

一生懸命ご奉仕して、ま……満足……いた……だ……き……ま……す……か……ら……下……さ……い……っ……っ……っ……！！

悲哀に満ちた哀訴は、最後は血涙混じりの絶叫になった。叫び終えた瞬間、不二子は血が滴るほど強く唇を噛み締めたが、一度吐き出してしまった言葉を取り返すことなどできはしない。マスクの下で、長男は今度こそ破顔すると、次男と三男に視線で合図を送った。

長男「満足させてくれるとよ。そいつが大言壮語じゃないか、さっそく確かめさせてもらうぜ」

次男と三男が横たわっていた不二子を左右から担ぎ上げた。既に準備万端の長男の直上まで軽々と運ぶと、屈辱と羞恥に震える女豹の両膝を長兄に委ねる。





三男「へッへッへッ、お仕置き追加だからな」

言わずもがなの前置きで女の恐怖を刺激しながら、蠟燭をゆつくりと傾けていく三男。カルデラ状に陥没した蠟燭の先端から、灼熱に煮え滾るマグマがゆつくりと溢れ出していく。

不二子「ウッ！・・・グウッ！！・・・ウアッ！」

ポタポタッと音を立てて、赤い熱蠟が素肌に弾けた瞬間、不二子は自らの産毛が上げるジュツという音を聞いた気がした。だが、その微かな音も、次の瞬間にはくぐもった自らの呻きが覆い隠してしまう。

三男「どうだ？久しぶりだと熱さもまた格別なんじゃねえか？」
不二子「グ、ウ・・・ウウ・・・」

鼻から荒い息を盛大に吐き出しながら三男を見上げる不二子。その額には夥しい量の汗が珠となり、全身も小刻みに震えている。亀甲縛りによって強調されたポリウム満点の乳房に点々と刻まれた紅い染み。それは滴下から10秒近い時間が経過した今も、硬化するどころか未だジリジリと素肌を焼き続け、ささくれ立った不二子の神経を責め苛んでいる。
“やめて”そんな意を込めて、三男に視線を据えたまま懸命に首を振る不二子。だが、三男にとっては、そんな女の風情そのものに堪らなくソッラれる。結果、再び三男は蠟燭を傾けた。一度目より、より深い角度で。

不二子「モグウア！！ガッ！！・・・ウグアアアアア！！！！！」



灼熱の紅い雨が、量を増して降り注ぎ、今度は乳房のみならず、腕に、腹に、滴、よ、また、一滴、反り、身悶え、絶叫、吸い、野、獣、心、願、う、な、喚、き、を、発、し、た、が、酸、欠、に、陥、り、熱、い、う、も、仰、け、め、て、鳴、こ、ろ、絶、叫、呼、たい、の、制、限、さ、れ、抱、え、な、が、酸、欠、に、陥、り、と、つ、つ、ある、脳、か、と、込、み、悲、鳴、こ、ろ、絶、叫、呼、たい、の、制、限、さ、れ、抱、え、な、が、酸、欠、に、陥、り、つ、つ、は、その、場、か、ら、は、激、痛、の、逃、げ、う、肉、か、し、だ、か、が、制、限、さ、れ、抱、え、な、が、酸、欠、に、陥、り、甲、状、腺、の、場、か、ら、は、激、痛、の、逃、げ、う、肉、か、し、だ、か、が、制、限、さ、れ、抱、え、な、が、酸、欠、に、陥、り、長、男、と、次、男、が、未、だ、に、眠、め、を、試、み、こ、の、難、し、い、熱、を、避、け、る、ど、こ、ろ、か、三、男、を、叩、き、暗、黒、の、街、で、女、豹、を、試、み、こ、の、難、し、い、熱、を、避、け、る、身、重、と、は、い、え、見、え、な、い、鎖、の、加、え、つ、て、雁、字、不、二、子、の、加、い、だ、か、し、い、熱、を、避、け、る、半、身、は、ま、い、で、月、に、渡、り、絶、對、的、な、恐、怖、と、な、つ、て、三、兄、弟、の、加、い、だ、か、し、い、熱、を、避、け、る、か、つ、た、子、の、存、在、が、渡、り、絶、對、的、な、恐、怖、と、な、つ、て、三、兄、弟、の、加、い、だ、か、し、い、熱、を、避、け、る、で、息、づ、た、子、の、存、在、が、渡、り、絶、對、的、な、恐、怖、と、な、つ、て、三、兄、弟、の、加、い、だ、か、し、い、熱、を、避、け、る、込、ん、で、い、た、子、の、存、在、が、渡、り、絶、對、的、な、恐、怖、と、な、つ、て、三、兄、弟、の、加、い、だ、か、し、い、熱、を、避、け、る、を、身、も、世、も、な、く、悶、絶、さ、せ、る、が、ま、ま、熱、蠟、を、浴、び、続、け、そ、の、ゴ、ー、ジ、ャ、ス、な、裸、身

(熱いッ！！！し、死んじゃう！！！ヒイヒイヒイ！！！あ、熱い！！！い！！！い！！！い！！！)

不二子は、食いだんだ爪で掌の皮を破るほどに、まで拳を握り締め、瞳の端に涙を浮かべ、食いだんだ爪で掌の皮を破るほどに、まで拳を握り締め、瞳の端に汗が滝のよう熱痛に全身の震えが止まらな、激震する素肌の光り輝かせる。

三男「おうおう、耐え忍ぶ顔もイイねえ、もつとエグく責めてみたくなるぜ」

皮膚タツプリに告げながら、三男の操る蠟燭の動きが変化する。全身にまんべんなく振り撒くようだったそれが、ある一点で停止する。

不二子「フグッ！？ギヤフウウウウウウウ！！！！」

その瞬間、汗と朱蠟でまだらに彩られた肢体が、落雷の直撃を受けたように亀甲縛りによつて絞り出されたことで、これぞ爆乳というポリウムを誇る666センチのバスト。いや、その頂点で固くそそり立つ肉芽こそが熱神のターゲツトだった。不二子の乳首は、来るべき出産、そして授乳の時に既に臨月を迎えて、不二子の乳首は、来るべき出産、そして授乳の時に向けて膨張、乳輪のサイズは倍近くまで膨れ上がっている。普段何れも過敏な乳頭とピリピリとした痛みが、堪え難い熱痛が耐えられず、それがなかに響き渡り、虚ろな等閑な顔に、瞳が白く剥く。だが、彼女が狂態はそれだけにとどまらず、どの向うも、衝動がよる、か、両手首を吊り上げ、口を自ら強く、異様な悲鳴と、失禁した。く、や、な、格、好、に、上、体、を、持、ち、上、げ、た、か、と、思、う、と、異様なましろ、男、と、次、男、が、醜態の発露を三男、そして不二子の絶叫によつて目を醒まし、本から長男と次男が増え、極太の熱蠟を待ち構えていた。後、冷却と称する精液、増え、極太の熱蠟を待ち構えていた。





そう言いながら、まさに子宮そのものを打ち砕かんとするかのような勢いで、立て続けに鋭く重いアッパカッの連続の衝撃の連続に、堪らず悲鳴と泣きを入る不二子。

不二子「ヒッ！イギイイイ！ごゆるりしてっ！！アオッ！！
い、一生懸命、アグッ！ご、ご奉仕します、しますからっ！！
もっど、優、しく、アアッッッ！優しくしてくださひいひい！！」

絶叫のものは無い。暴力に怯える無力な女そのものの姿はもはや孤高の女。盗賊のものでは無い。哀訴を振り絞るその姿はもはや孤高の女。

次男「ああ？優しくして？上の口がそう言う割には
下のお口は大洪水だぜ」

勝ち誇るように告げる次男の言葉に偽りは無かった。事実、不二子の股間には先程の絶頂を境に、半ば潮を噴き放した。既に次男の下半身どころか、床にまで大きな水溜りを作っている。

次男「今頃、お前のマゾ根性が腹の甲斐のまで遺伝してらるせ、きつと。
無事に生まれたら、調教のし甲斐のある極上の牝になりそうだぜ」

そんな次男の言葉も、不二子は眉間を歪めて唇を噛むことしかできなかった。不二子の声は張り上げて、禁と見違わしうかきかき、淫欲に染みだす。肉棒の出入りしている内容は、反論の媚加え、失禁、浅まし、淫欲に染みだす。肉棒の出入りしている内容は、反論の媚加え、失禁、浅まし、淫欲に染みだす。



改め「マゾ声と重く呪わしめる言葉が、
の感で不烈と苦痛にしかかきかき、
改め「マゾ声と重く呪わしめる言葉が、
の感で不烈と苦痛にしかかきかき、
改め「マゾ声と重く呪わしめる言葉が、
の感で不烈と苦痛にしかかきかき、

認め、自分がない。マゾとして悦びに目覚
だ、それが、恥、溺れ、思、認
て、いま、ば、意、地、も、誇、り、身、を、委、ね、れ、ば、
打、ち、ま、だ、も、意、地、も、誇、り、身、を、委、ね、れ、ば、
この、張、り、裂、れ、さ、れ、る、ば、快、楽、の、こ、こ、口、の、痛、み、

恠喝するとういう表現そのままに怒号を放つと、必死の抵抗を続けていた不
二子が嘘のようにピタリと停止した。次男は心の中だけでニヤリと笑うと、
声音を変えぬまま続けた。

次男「タツプリ突き上げて、イカせまくってやろうと思ったが、
気が変わったぜ。——お前が動け」

不二子「馬鹿か、お前は？ケツを振ってオレ様をイカせるって言ってんだっ
不二子「それ、そんな……」
次男「できねえってのか？」

言うや否や、次男の手が伸び、臨月に達した腹部をグツと強く掴んだ。

次男「さあーでどれくらい圧迫すれば腹の中のガキは死ぬんだろうなあ？」

不二子「やめてっ！！」
次男「やめないね。腹ポテのメス奴隷が、ご主人様の命令を聞けないって
いうんじゃないや、示しがつかねえ」

ジワジワと腹部に対する握力を強めてくる次男に、遂に不二子が折れた。

不二子「わかったから、もうやめてっ！言うとおりにするから……」
次男「分れば結構。カメラを回し始めたら、最初に“こう”言うんだぜ」

次男から指示された台詞に、不二子は今度こそ顔色を失ったが、もはや
反抗しようとはしなかった。そして——カメラが回された。

不二子「ねえ……見て。わたしがあなたの……お母さん、わたし……
淫乱で……変態の……マゾ、奴隷……それが、わたし」

カメラを見つめた不二子は、浮かした血を腰に絞って、大黒肉塊が晒す徐々たる音を立てて、
なだれた肉塊がズブと音を立てて、
え、の、再、び、カ、メ、ラ、を、見、た。
は、の、再、び、カ、メ、ラ、を、見、た。

不二子「あなたも……わたしも……
立派なマゾ、奴隷に……な……



命ぜられた呪いの台詞を全うするまで、
た、不、二、子、は、一、度、唇、を、出、し、ほ、い、
絞、め、た。さ、始、め、る。瞬、間、を、決、
に、躍、動、さ、せ、去、る。二、子、自、
付、し、た。あ、ろ、覚、め、を、迎、え、
母、と、ば、ら、女、子、を、守、る。一、
な、は、ら、で、女、子、を、迷、い、草、を、
そ、の、過、程、で、も、自、ら、の、み、
腹、の、子、を、す、ら、で、マ、ゾ、と、呼、
び、ら、ず、守、る。で、も、き、







淫虐に馴らされた肉体と精神は、あっといいう間に快感と悦楽に呑みこまれ、気がつくやうに自ら腰を振って長男のいきり立った男根を貪っていた。肉と肉がぶつかり合う激しい音。杜と牝の発する生々しい呻きが部屋中に充滿していく中、長男は再び思った。

(本当に、この女を……殺せるのか?)

本人にとつては、数分前と同じつもりの間。だがそれは、数分前からは明らかに変化をきたしている。萎び始めた三男の雄根を未だ啜えつつ、背後からの長男のピストンと内なる魔悦に耐える不二子。タガの外れたように本能の命ずるまま不二子を犯し続ける長男。

今はこの場にいない次男。そして、この場にいない三男。一人の女と三人の男たちの未来は、未だ混沌としたままだった。









不二子が緊急搬送された病院の医師は、当初、母体の衰弱があまりにも激し
 いことから、墮胎もやむなしと判断して、胎児は無事この世に生を受け、あ
 がらも不生子が強行に赤ん坊（元氣な男児）は、誰が何をどう教えたものか
 できた。自らを「ルパン小僧」と名乗ることになる。少くとも本人は、自
 やがて世界を股にかけた大泥棒一族の三代目と、暗黒街の女王とも呼ばれた
 美女の間で呼ぶか不幸と呼ぶかは、当事者らにもわからな
 美女の幸運と母は、信じたか、疑わな、そのことについて、ただ一度たり
 かなことは、父と母は、信じたか、疑わな、そのことについて、ただ一度たり
 と、言及しようとは、しなかつた事実だけだ。人は、そのことについて、ただ一度たり

抱一ろ三ど姿た。二子
 き度う兄まを消彼は、オヤジ長男
 上と弟のにしたは、あ搬送さ
 酷げし暴虐を注ぎ、
 薄な赤坊に、
 故いそのんか腕坊ら守
 抱き度う兄まを消彼は、オヤジ長男
 上と弟のにしたは、あ搬送さ
 酷げし暴虐を注ぎ、
 薄な赤坊に、
 故いそのんか腕坊ら守

母な | 抱一ろ三ど姿た。二子
 とい。 | き度う兄まを消彼は、オヤジ長男
 母な | 上と弟のにしたは、あ搬送さ
 とい。 | 酷げし暴虐を注ぎ、
 母な | 薄な赤坊に、
 とい。 | 故いそのんか腕坊ら守

不 | 抱一ろ三ど姿た。二子
 疑 | き度う兄まを消彼は、オヤジ長男
 狂 | 上と弟のにしたは、あ搬送さ
 不 | 酷げし暴虐を注ぎ、
 疑 | 薄な赤坊に、
 狂 | 故いそのんか腕坊ら守

狂 | 抱一ろ三ど姿た。二子
 不 | き度う兄まを消彼は、オヤジ長男
 疑 | 上と弟のにしたは、あ搬送さ
 狂 | 酷げし暴虐を注ぎ、
 不 | 薄な赤坊に、
 疑 | 故いそのんか腕坊ら守

狂 | 抱一ろ三ど姿た。二子
 不 | き度う兄まを消彼は、オヤジ長男
 疑 | 上と弟のにしたは、あ搬送さ
 狂 | 酷げし暴虐を注ぎ、
 不 | 薄な赤坊に、
 疑 | 故いそのんか腕坊ら守

狂 | 抱一ろ三ど姿た。二子
 不 | き度う兄まを消彼は、オヤジ長男
 疑 | 上と弟のにしたは、あ搬送さ
 狂 | 酷げし暴虐を注ぎ、
 不 | 薄な赤坊に、
 疑 | 故いそのんか腕坊ら守

